



▲星合委員（KORENふえふき代表）▲

「市営の温泉を使って子どもと高齢者がられあう取組みを去年11月に試して始めさせていただきました。市福祉総務課にも一緒に考えていただいて、今年度は4回、子どもと高齢者が一緒にお風呂を子育て支援センターとして使うという取組みを始めてさせていただきました。今1回やらせていただいたところで、今後10月、11月、12月と、あと3回頑張ってみてみたいと思っています。障がい者の方も、貧困家庭の子どもたちも色々な方たちが集まり、そこで一緒にお風呂に入ったり、一緒にご飯を食べたりするということがこれから考えていきたいと思っています。」



▲風間委員（笛吹市老人クラブ連合会会長）▲

「笛吹市はそれぞれ各地の農村地帯に無尽や囲碁の仲間、釣りの仲間、お風呂の仲間など、仲間のグループがいっぱいあります。それを上手く拾い上げることを、老人クラブでは今、考えています。行政区の中だけでやろうとすると無理があるのです。各地域から囲碁の好きな人を集め、10人集まったら老人クラブの囲碁部というかたちで活動するというようなかたちです。また、5人か6人でお風呂へ行ったり、グループで集まると、『今後、笛吹市をどうしようか』、『俺たちの町はこれで良いのか』という話が時々でてきます。それをなんとか上手く回収しながら地域の活動の実態を知ってその上に連絡をすることも可能ではないかと思います。」



▲志村委員（一般市民）▲

「風間委員がおっしゃったつながりというのはこれまで以上に増えていくと私も思います。それと合わせて、地域、エリア、自分の住んでいる行政区、あるいは小学校区といったつながりの中でどんなふうに地域福祉を考えていくかという視点でも考えていかなければいけないと思っています。その中で、社協が情報をどういうふうに届けていくかということをもう少し工夫する必要があるかと思っています。例えば、社協職員は各行政区の方とつながっていると思うので、そのエリアで社協の方が来てPRしていただくとか、地域の在り方について『地域福祉、防災等のこれから本当に大事になってくる課題に対して取り組んでいきましょう！』ということをお願いしていただくのも良いのかなと思います。そういったネットワークをひとつひとつ増やしていくことでニーズに対応した取り組みに広がりが出てくるのかなと思っています。」



▲中村委員（笛吹市教育厚生常任委員会委員長）▲

「私の行政区ではいきいきサロンを通じて活動をしています。区の役員が中心となっていきいきサロンをしているのですが、ここのところかなり参加される高齢者が増えているようです。たまたま今年この役員の中にリーダーシップをとれる方がいて、その人が冗談を言いながら会を盛り上げています。また、私の行政区は200戸位の農村地帯でまとまっており、軽トラックで10分もあれば区内を1周できるような状態のところなので、私の年だと一番ご高齢の方まで名前がだいたい分かります。下は40歳くらいまでの方は分かりますが、30代、20代となると『あれ、あの人はどこの人だったかな。』というような状況が起きています。」



▲田草川委員（一般市民）▲

「私はいきいきサロンに行っていて、来ている人はいつも同じです。これは内容的に問題があるのか、あるいは声かけをしないから問題なのかと考えて問題点は見えてきました。また、私が住んでいる地域では不動堂を中心として年に数回集まってお祭りをしています。それから、老人クラブの会長がとても元気な方で、老人クラブ会員で元気に佐渡へ1泊2日で行って来ました。やはり、リーダーになる人をどこでどう養成していくかということが社協も、私たち住民も考えることだと思います。また、私は春日居の西保育所へ行き、年長さんと一緒に論語を30分読んでいます。地域の子どもたちが私を見かけると論語の先生だと言ってくれるので、子どもたちとのふれあいの中で私にできるのはそれだと思っています。」



▲羽田委員（笛吹市障害者団体連絡協議会会長）▲

「人と人とのつながりがまだ浅いと思っています。地域住民の皆さんは障がい者がどういう障がいを持っているのかということをご存知ない方が多いと思います。障がい者のことを理解していただきたいと思っていますが、その辺りは地域の皆さんとのふれあいも大事で深めなければいけないと私自身も思っていますので、そこを心がけていきたいと思っています。例えば災害の訓練にも参加しており、参加する障がい者の数も増えてはきていますが、住民の皆さんに私たちのような障がい者がいるということを知っていただくことが大事かと思っていますので参加することで少しずつ皆さんが知ってくださっているのではないかとと思っています。」



▲飯島委員（笛吹市保健福祉部長代理）▲

「皆様の話をお聞きしていて、やはり地域の中でキーパーソンとなる方がいるということはとても大きいと思います。地域の中でリーダーシップをとったりして、地域づくりのための人材を育成していくことも大事だと感じました。それから、地域の中にはまだ眠っているお宝が、人・ものたくさんあると思います。情報を発信・収集していく中で自分たちが地域を知っていくということがすごく大事で、行政も情報を発信していく必要性が大きいと感じました。また、地域づくりということで今、叫ばれているもののなかなか進まないのが行政と市民との協働です。これからは行政だけでは色々なことが成り立ちませんし、一番の底力となるのが住民の方たちのつながりや力だと思います。そのためには行政と社協とが上手く連携して地域の方々との連携をさらに強めた中で、地域の皆さんが自主的に自分たちの地域をつくっていくという意識をもっていただくための仕掛けが重要だと改めて感じたところです。」



▲橋田委員（笛吹市社会福祉協議会常務理事）▲

「色々な会議がありそれぞれのつながりがありますが、地域に関するつながりといいますと、それぞれごく限られた人しかでてこないというのが一番問題で、我々としてはできるだけ多くの地域の方々にでてきてもらわなければつながりが深まらない、広まらないという認識をしております。そんな中で、災害ボランティアセンターの訓練を何年か前からやっていますが、あのテーマだと今まで色々社協で仕掛けるイベントでは見かけないような方も混じってきていただいているということが見受けられます。やはり、それぞれのテーマをはっきりしてそういうことをやっていくのも多くの方にでてもらえる仕掛けかだと思います。」



▲林委員（学識経験者）▲

「社会的な孤立化をどう防止するのかというのがひとつのポイントかと感じました。つまり、色々な集まりにでてこれない人、でない人、でたくない人、色々な理由はあるかと思うのですが、そういう状況にある人をどうその場所にでてもらうか、あるいはでなくても良いから少なくとも地域の人とのつながりをもってもらえるのか、地域の人に関心を持ち続けることができるのかを考えていくことが大切だと思います。社協の機能にはそれらもあります。アウトリーチをしたり、色々な行事や事業をやっていく中で地域の人たちとの関わりを深めていくこと、相談を受け付けていること、必要な専門機関とつながりがあること、そういう社協の機能を、社協が地域の皆さんに十分に説明できていたのかどうか、あるいはそのことをきちんと伝えることができていたのかどうかというのがひとつ課題なのかと思います。『あの人のこと、昔は知っていたけど最近外に出てこない。どうしたかな。心配だから社協さんのところに行ってちょっと相談してみようかな。』というような関係づくりを住民の皆さんとできるような体制づくりをしていくことが、この課題でいうところの色々な場に出てこない人への対応のひとつになるということを考えさせていただきました。」

策定委員の皆様から様々な意見が出され、市川先生がまとめてくださいました。



▲市川先生（特別アドバイザー）▲

1つ目のポイントは実践の中で気づきをそのままにしないということです。やはり皆さん方色々な気づきができていますから私が教科書的にこれをまとめるなんて無理なんですね。直接的なものは皆さんしか分からないものでそれが大事ですよね。気づきをそのままにせず、まず思い立ったらやってみることが大事です。

2つ目は、生活の延長で無理なく行なう、日常生活の延長で無理なく行なう、風間委員のそれぞれの活動、日常生活ですよ。その中で無理なく行なえるような、また、星合さんがやってらっしゃるような身近で子育ての人たちがやれるということ、これはとても大事で、自然体で特別なことではありません。

3つ目は生活の導線に合わせることで、そのお年寄りはどこに行かれるかなとか、子どもを育てている方がどこに行かれるかなとか、お年寄りが介護予防はどこに行かれているかなとか、そこに情報をおけば通じます。ですから、生活におけるその人の動きを見て、そしてそこで支援していくことが大事です。

4つ目は地域資源を活用するということです。羽田さんが当事者であることは事実で、その方と出会ったりそこから学んでいくことができる資源ですよ。宝なんです。また、専門職や住民、ボランティアもとても大きな宝ですし、例えば施設がちゃんと活用できるかとか、空いていて使われていない施設がたくさんあると思います。その場所をうまく使えばサロン活動ができますよ。お寺でもそうです。見ると、お寺はたくさんありますね。お寺でサロン活動をやらせていただければ良いのではないのでしょうか。あと、教会もありますからそこを場所にしても良いですし、商店街、シャッター街を使っても良いわけですよ。また、住民関係、地域関係は見失ってはいけないと思うんですね。先ほど、皆さんが集まる会があるという話がありましたが、そういう住民関係、地域関係もありますし、これは資源ですよ。ネットワークとありますが、資源を吟味していくこと、どういう資源があってどうやってそれが動いているかを確認することがこの計画の軸になります。ですから資源の吟味、つまり何ができるのか、何があるのかを歩いて探してみないと。やってみようという人がいるかもしれませんよ。これは大きな資源ですよ。それから、今回は座談会をやりませんが、その他多様な把握方法があるわけで、それは見失わないで把握しておいてください。

最後になりますが、協働とあげていますが、協働をする場が明らかでない、色んな住民の方に場が定期的にもたれないと協働はなかなかとりにくいんですね。協働のためには互いの認識が必要です。「これをやるんだ」とか「こういうことをやるんだ」とかを話せる場、集まれる場をどうつくるか、これが介護保険でいうケア会議等色々な場所ででてくるのはこういう場をつくらうということです。活動をしながら協働ができるわけです。民生委員の中から一緒にサロンをやる等、そういうところで協働が成り立っていますから、協働の場をどこに設けるのかということ議論していくことが大事だと思います。

ています。また、継続的に計画的に行なうことがとても大事だと思います。つまりこれはなんなのかというと、お互い様の立場で話し合えるとか、住民が気軽に寄り合い相談できる場とか、困ったことが話せる雰囲気づくりとか、やりがいや生きがい等を育てていく、このように継続的にサロンや地域活動を進めるポイントを明確にしておくことがこの活動計画では大事なのではないでしょうか。その中でこれは協働しようと決めていきます。私が必ず言うのは、『地域活動の先生は皆さんです。』ということです。つまり分かっているのは僕ではなく皆さんなのでそれを活かせば良いと思います。」